

植物をもっと個性的に飾るには？

www.elle.com/jp/decor/

ELLE DECOR

30
Years



特別付録
鹿児島 睦
ポストカード
2枚セット

no.175

エル・デコ
JUNE
2022
the world's
leading
design &
lifestyle
magazine

JAPAN

鹿児島 睦さんのアートに浸る
特別な場所へ

LIVING WITH
GREEN

植物空間術

“昭和なグリーン”を
鉢選びでフレッシュに

知っておきたい！
若手デザイナー30

欲しいのは
コンパクトな家具

湖畔の眺めと暮らす家
特別なキッチンがある幸せ
おいしいインテリア研究



Magazine Cloud
電子版でも読めます



エル・デコ日本版30周年企画

知っておきたい！ 世界の若手デザイナー30

モダンデザインの歴史を30年間見つけてきたエル・デコ日本版が、次の時代をつくる若手デザイナー30人を選出。この先のデザインは、もっとおもしろい！

Realization TAKAHIRO TSUCHIDA(p.86-97) Text SHIYO YAMASHITA(p.84-85), TAKAHIRO TSUCHIDA(p.86-87,94-97), YOSHINAO YAMADA(p.88-93), CHISATO YAMASHITA(profile)

ELLE DECOR

30
Years

Who is

Next?

“日本の優れた才能と世界をつなげるのがエル・デコ ジャパンの仕事のひとつ”

エル・デコブランドディレクター 木田隆子

2009年、私たちはEDIDA（エル・デコインターナショナルデザインアワード）の日本版ノミネートに合わせ「ヤング・ジャパニーズ・デザイン・タレント賞」を創設しました。EDIDAではこれまで深澤直人さん、吉岡徳仁さん、nendoの佐藤オオキさんがデザイナー・オブ・ザ・イヤーに選ばれています。世界25カ国の編集部が推す国際的な候補の中で日本のデザイナーが存在感を発揮するのは大変なこと。そこでわれわれも、自国の優れた才能を世界とつなげる活動と考えたのです。

初年度に受賞したTakramは、デザイン、エン지니어リング、ビジネスをひとつにしている新鮮さから選出したことを今も覚えています。12年には4人が受賞しましたが、倉本仁さん、田淵智也さん、角田陽太さんは「ジャパングリエイティブ」でR&Dとして海外のトップデザイナーと協働する中で知見を深めていたし、柳原照弘さんは活動当初からグローバルな視点を持っていました。

また、16年に受賞したMissioや武内経至さんはミラノと東京を行き来して活躍中。辰野しずかさんはロンドンでの体験を背景に、日本の伝統とモダンデザインを独自の感性で結びつけ、17年受賞のwe+は、コンテンポラリーデザインという新領域を世界視野で開拓しています。

振り返るとアイデアの良さや挑戦する力に加えて、世界を自分のフイ

ルドだと捉えていた若い才能に、エールを送ってきたのだと思います。それはグローバルメディアだからこそできる応援もあり、自国をよく見つめ、同時に国境を越えて、デザインの新しいミッションを探そうとする試みへの共感でもあります。

時代が大きな曲がり角を迎えた2022年2月24日以降に感じることは、21世紀のデザイナーは、20世紀とは違う使命があるということ。この状況から新しい社会的課題が生まれざるを得ないし、デザインの領域を定義し直す試みも、さらに加速することでしょう。困難な時代にこそ、果敢に世界に挑戦して欲しいと思います。



©Jeroen Verrechi

3



©Jeroen Verrechi

1



©Jeroen Verrechi

2

1 カーワングャラリーにて展示されたのは、一点ものやエディションで制作される作品「Rooted Flows: Solidified Reflections」シリーズ。レジンで制作された照明のオブジェ。
2 石組みに着想を得た鋳造のオブジェ。
3 金属を折り曲げて製作されたテーブルは家具であると同時にアートピースのたぐいまれを持つ。

©Valentina Sommariva

石組みから着想を得た明解でマッシブなフォルムの作品を、オットマンとして再構成、ミラノデザインウィーク中にカッシーナ・ミラノショールームで発表する。

1. *Linde Freya Tangelder*

リンデ・フレイヤ・タンゲルダー



カッシーナが魅了された才能! 古典要素を分離、再解釈する

2008年の設立以来、フォルマ・ファンタズマやサビーネ・マルセリス、スタジオ・スウィンなど、世界的デザイナーを多数輩出したイタリア・トリノのワークショップ「イン・レジデンス」。そこで見いだされた次なる才能が、リンデ・フレイヤ・タンゲルダーだ。彼女はこのプログラムの成果を、ギリシャのカーワングャラリーにて「Rooted Flows: Solidified Reflections」のコレクションとして発表。ヨーロッパの建築的特徴、ランドマーク、素材、都市を「印象」として捉え、物質として固着化するという彼女独自の手法で生み出された作品群は、輪郭が溶解したアウトラインや、建築的要素のコアを抜き出した塊のようにも見える。この一連の制作を、若手育成のための取り組み「パトロネージュ」の一環としてバックアップしてきたカッシーナは、6月に開催されるミラノデザインウィークにて、この作品をマストプロダクション化したものを発表するというから楽しみだ。

Profile 1987年オランダ生まれ。2014年までアイトホーヘン・アカデミーで学び、ベルギーに自身のスタジオ、Destroyers/Buildersを設立。以降、エルファアやクリスチャン・ディオールなどから作品を発表している。
destroyersbuilders.com



Profile ディラン・デイヴィス(右)とジーン・リーによるデザインデュオ。共にシアトル生まれ。2003年にワシントン大学で出会ったことがきっかけで、10年デザインスタジオを共同設立。ladiesandgentlemenstudio.com

4. Ladies & Gentlemen Studio

レディース&ジェントルメン・スタジオ

世界が注目し始めた アジアから登場したホープ

中国出身のデザイナーが徐々に存在感を増しているが、コンセプトの鋭さで際立っているのがマリオ・ツァイだ。この国の新進デザイナーが参加するレーベル「DESIGNEW」でも中心的な役割を担う。「オリジン」はこのレーベルの作品で、人間の創造の原点にフォーカスした家具コレクション。ミニマルな印象の強かったツァイの新境地を思わせる。

現代のテクノロジーに疑問を持ち、そのアンチテーゼとして制作した「オリジン」シリーズ。中国杭州から丸太を仕入れ、実際に焼いて炭化させたプリミティブアートのようなプロダクト。



©Chenhuo

5. Mario Tsai

マリオ・ツァイ



機能を超えて発揮される コンテンポラリーなセンス

ブルックリンを拠点に活動するレディース&ジェントルメン・スタジオは、機能にとらわれず直感的に発想したオブジェを得意とする。モバイル作品は彼らが継続して取り組んでいるもので、素材、色彩、動き、バランスなどの調和が美しい。主にアメリカのブランドとコラボレーションするほか、ふたりのスタジオで手づくりするエディション作品も多い。

1「モアレモバイル」は、曲がった板金を重ねて製作されたもの。周囲の景色を不透明に映し込む。2 中国のブランドと協業して製作したフラワーベース「Kaarem×LG Vase」。

©Jonathan Hokkio



アメリカの木工家具の伝統を 現代にアップデートする

祖父の代から木工職人という家に生まれたコーディ・キャンパニーは、「カンバーニュ」名義でクラフトマンシップあふれる木の家具をデザインし、自ら手づくりしている。木の魅力を熟知した彼のセンスは、フォルムや構造はもちろん表面の仕上げにまで発揮される。昨年、発表された「ロール&ヒル」の家具コレクションで一躍、注目度を高めた。

1 自身のスタジオ「カンバーニュ」より発表した「Johann Coffee Table」。ミッドセンチュリーの家具から着想したもの。2 一点ずつ手作業で製作されるコートハンガー「Peg Coat Rack」。



2. Cody Campanie

コーディ・キャンパニー



Profile 2008年ブラウン大学で建築史を専攻。Kite Architecture、The London Planeなどを経て、17年、オレゴン州ポートランドに自身のスタジオ、カンバーニュを設立。campagna.cc

3. MULTISTANDARD

マルチスタンダード



Profile 2020年にスタートした、秋山亮太(あきやま りょうた)、シン・スダンリー、古館社真(ふるたて そうま)、松下陽亮(まつした ようすけ)、田渡大貴(たど だいき)からなるデザインコレクティブ。新しい視点をツールにコンテンポラリーなデザインを生み出す。www.multistandarddesign.com

Z世代のデザイン集団が問う デザインの未来と可能性

個々での活動も活発な5人のクリエイターが、2020年に共同で立ち上げたプロジェクト。未来の多様な暮らしに関する可能性に新たな視座を与えることをコンセプトに、リアル、プロセス、コンテクストを読み直し新たなデザインを生み出す。昨年のデザイナーズでは、渋谷の廃墟ビル一棟に手を加えて展示空間とした「1-15-22 Apartment」が話題に。



1「接着材」を素材として捉え、オブジェクトの表面にパターンとして表出させた「oozing」。2 国産のヒノキをまき割りの手法で割り合わせにしたスツール「chopping」。フォルムは木の性格に委ねられ、木の生きた姿を露出する。



©Sarah Hosli

10. Sarah Hosli

サラ・ホッスリ

スイス流の合理主義をふまえた
人間的な優しさのある家具

サラ・ホッスリは、2021年度のスイスデザイン賞家具部門のグランプリに輝いたデザイナー。木工について豊かな知識を持つと共に、高齢者の増加など社会的課題にもアプローチしている。簡単に組み立て可能な「Regard」をはじめ、素材も人にも、優しさを感じるデザインだ。

Profile 1990年生まれ。2013年ルツェルン応用科学芸術大学卒業後、'20年にECALのプロダクトデザイン修士課程を修了後、'21年からスイス・パラリンピック・センターでワークショップも行う。www.sarahhosli.ch



©Dragon Piatkovic

12. Anthony Guex

アントニー・ゲ

実直につくられた木の椅子が、
シンプルな奥深さを伝えてくれる

木工職人の経験を積んでからデザインを学んだアントニー・ゲの作風には、過去と現代の家具のよさが融合する。現在のシーンの仕掛け人、アンニーナ・コイヴが監修するカナダの「フォーゴ・アイランド・ワークショップ」の椅子は、近年のベストチェアのひとつだ。

Profile 7年間家具職人、木工職人として働いた後、大学でインテリアデザインを学ぶ。2015年にローザンヌ州立美術学校卒業後、自身のスタジオの仕事と、ローザンヌ州立美術学校での芸術監督補佐。anthonyguex.ch



現代のデザイナーならではの
控えめな作風に愛着が湧く

「SEINÀ Bench」をはじめ、ジュリアン・ルノーのプロダクトは、空間や環境にスッと溶け込んでいく。しかしクローズアップして見るとすみずみまで精度が高く、使う人への配慮が行き届いている。アイコンックなものをつくるデザイナーではないが、その控えめさこそ今日の。

Profile フランス生まれ。2004~'07年までESADで学んだ後、'08年ブルレックススタジオで半年間働き、'09年にECALを卒業。'11年よりブリュッセルを拠点に活動。www.julienrenaultobjects.com

9. Julien Renault

ジュリアン・ルノー



クリスチャン・ヘイクープ

11. Christian Heikoop

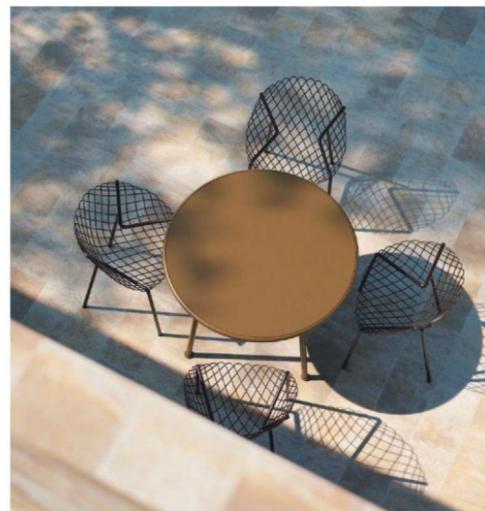
プロダクトの領域にこだわらず
常識を超える新鮮なスタイル

ファッションやグラフィックからも影響を受けているというクリスチャン・ヘイクープのデザインは、常識を軽々と超える独特のシュールさを持つ。最近ではアメリカの「DIMS」で発表した椅子が話題に。やがて時代のアイコンを生み出しそうな才能の持ち主だ。

Profile アイントホーフェン・アカデミー卒業後、2017~'20年ショルテン&バーイングスのスタジオで働く。その後独立。Savills Nederland, Maedenのデザインも手がける。christianheikoop.com



©Ina Nahoff



6. Nick Ross

ニック・ロス

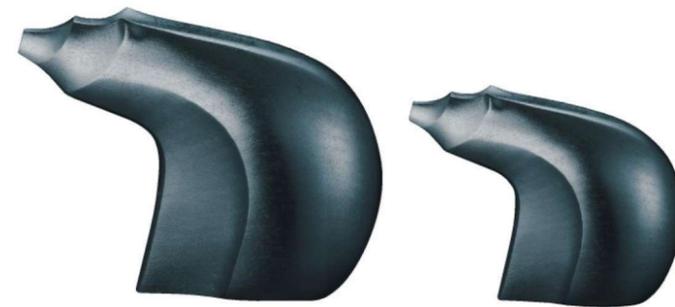


純粋な造形の原点にあるのは
豊かな歴史や文化のリサーチ

一見、ミニマリスト。しかし純粋なフォルムをつくり出す過程でニック・ロスが参照するのは、多様な歴史や文化だ。人類が古代につくっていたものまでさかのぼってモチーフを見だし、その要素を現代のデザインへと応用していく。アルミニウムや樹脂など、無垢な素材との向き合い方も深い。

1 ルイ・ヴィトンのプロジェクト「LOUIS 200」のために製作したフラワーベース。**2** Niko Juneのために製作したアルミニウムのテーブル「P-L 03 coffee table」。

Profile 1986年生まれ。グレイズ・スクール・オブ・アートでプロダクトデザインを学び、コンストファックで修士号を取得後、2013年に卒業。'14年に自身のスタジオを設立。nickross.com



ものづくりの技に敬意を払い、その力を引き出すデザイン

ミラノ出展を足がかりに評価を高め、海外の家具ブランドとの協業から日本の地場産業とのプロジェクトまで、仕事の幅を広げる北川大輔。デザイナーと製造する側の視点も併せもち、感性豊かで革新的なプロダクトを生み出している。オブジェ「KUMA」をはじめ「ピリカモンライケ」では造形力の高さを見せつけた。

Profile 金沢美術工芸大学卒業後、家電メーカーを経て2015年に独立。家具や日用品、ロボットなど幅広い領域で活躍。最近では東大阪の地場産業プロジェクトのディレクションも担当。レッド・ドット・デザイン賞ほか受賞多数。

7. 北川大輔

きたがわ だいすけ



8. Julie Richoz

ジュリー・リショズ

どんな素材でも変わらない
軽やかさとエレガンス

ジュリー・リショズはスイスのECALを卒業して早々に注目を集め、詩的で洗練されたデザインを生み出してきた。色彩の鮮やかな作品も多く手がけるが、新作「GINKGO」では日本の伝統的な鋳物に挑戦。そのイメージを一新する、軽やかさと優美さが彼女らしい。

Profile 1990年生まれ。'12年ECALを卒業後、'13~'15年までピエール・シャルパンの元でプロジェクトアシスタントとして働く。'15年に自身のスタジオを設立。'17年より、ECALにて教壇に立つ。www.julierichoz.com



©COOON



歴史を読み解き
コンテンポラリーに表現

コペンハーゲンを拠点に、住宅、店舗、オブジェや家具のデザインなどを行う建築家。歴史的建造物の修復や改築を専門としていたことから、空間に宿る時間の堆積を巧みにすくい取りながらミニマルな要素を組み合わせ、再構築。石づかいの巧みに注目したい。



1 コペンハーゲンにある19世紀初頭の住宅を、デンマークの伝統的な素材を使って再生。2 2018年に夫のためにデザインした机が基になった「Mattina Desk」。北欧の木工技術を用いて製作。

Profile コペンハーゲンを拠点に活動する建築家。デンマーク王立美術院を卒業後、2016年に自身のスタジオを設立。歴史的な建物のリノベーションプロジェクトを主に手がけ、近年ではプロダクトデザインの分野でも活躍。daniellesiggeerud.com

15. Danielle Siggeerud

ダニエレ・シガード



Profile 2013年に鈴木良と小山あゆみが設立したクリエイティブユニット。リテールショップやレストランなどの空間デザインに加え、プロダクトデザイン、インスタレーションを手がけるなど多方面で活動。atma-inc.com

13. AtMa

アトマ

環境への意識と素材へのまなごしで、循環のサイクルをつくる

自ら運営するインタラクティブスペース「COM」はミニマルなインテリアの奥に物語性が潜む。環境負荷への配慮から、既存要素を巧みに継承。店内に並ぶ椅子は、不具合のある椅子をリペア、リデザインした上でリースを行う仕組み。自身のデザインで循環の環を生み出す。



16. RAW COLOR

ロウ・カラー



グラフィックの力で
社会的な問題にフォーカス

オランダ・アイントホーフェンに拠点を置くデザインスタジオ。グラフィックデザインをベースに、洗練された素材と色づかいでテキスタイルやプロダクトを表現。2021年に発表した「テンパーチャーテキスタイル」は、毛布やスカーフなどで気候変動を表現し、人々に直感的な理解を促す。

Profile 1979年生まれのクリストフ・ラフ(左)、1981年生まれのダニエラ・ター・ハールによるデザインスタジオ。作品の一部はクーバー・ビューイット美術館、ステッドライク美術館、テキスタイル美術館に収蔵。www.rawcolor.nl



身体との対話が生ま出す、
温かみあるミニマリズム

プロのダンサーとしてトレーニングを受けた経験を持ち、インテリアのスタイリングとデザインの両面で活躍するキング。日常の行為や仕草、不完全なものにインスピレーションを受けるといふ。ニュアンスのある素材と色を重ね、温かみあるミニマリズムが特徴的。

1 家具ブランド「ウエストエルム」がLAの邸宅を舞台に行ったキャンペーンビジュアルのスタイリングを担当。2 ファッションブランド「アンソロポロジー」のキャンペーンビジュアルのスタイリング。

14. Colin King

コリン・キング



Profile オハイオ州生まれ。18歳の時にニューヨークに移る。トレーナー、スタイリスト、ソーシャルメディアマーケティング、フローリストとして働いた後、現在は主にスタイリスト、フォトグラファーとして活躍。www.colinking.com





21. *Andrés Reisinger*

アンドレス・ライジンガー

NFTから生まれた家具が現実の家具にも広がる

バルセロナを拠点に活躍するデジタルアーティスト。ドリーミーなイメージを持つバーチャルな家具はNFTのオークションにて高額で取引され、メタバースなどの仮想空間に配置される。一方で、昨年のミラノデザインウィークでは具現化した家具作品を発表した。

Profile アルゼンチン出身、1990年生まれ。2008~'14年のブエノスアイレス大学在学中、'13年自身のスタジオを設立。'20年には、Forbes 30 Under 30の一人に選ばれた。reisinger.studio



18. 小大建築設計事務所

(小嶋伸也 + 小嶋綾香) こじましんや こじまあやか

二拠点で活躍する建築家夫妻はリノベーションの新たな形を模索

小さなことから大きなものまで、最少の手数で最大限の効果を出したい、との意図を込めた名で東京と上海を拠点に活動する。近年は自邸の改築を皮切りに、日本の心地よい美のある暮らしを実現するマンション・リノベーションの活動として「一畳十間」を始めた。

Profile 小嶋伸也と小嶋綾香が率いる東京・上海を拠点とする設計事務所。共に大学卒業後、隈研吾建築都市設計事務所を経て独立。建築・インテリアに関するプロジェクトのほか、「一畳十間」の運営も行う。ko-oo.jp



ウルトラスタジオ

20. *ULTRA STUDIO*

シンボリックな空間表現を模索する建築ユニット

日本とヨーロッパで経験を積んだ向山、上野、笹田の3人が共同主宰。都市、歴史、物語性などを手がかりに三者で議論を重ねる建築は論理的でいて多面的。リノベーション事例「2LDK in OKUBO」をはじめ、色づかいや素材、フォルムはどこかポストモダンを思わせる。



Profile 向山裕二、上野有里紗、笹田侑志が共同主宰する設計事務所。2013年に結成後、日本とヨーロッパで経験を積み、'18年から東京で活動開始。建築のほか、舞台美術や美術展など多方面で活躍。ultrastudio.jp



17. 工藤桃子

くどうももこ

多岐にわたる空間に貫くマイクロとマクロの視点

建築、インテリア、展示構成など、多岐にわたる空間を手がける工藤は、素材や人の行動に強い関心を持つ。帝国ホテルのバティスリー「ガルガンチュワ」でもディテールへの緻密なこだわりとともに、大胆なフォルムでカウンターを構成し、美しい空間をつくり出す。

Profile 多摩美術大学環境デザイン学科卒業後に松田平田設計での勤務を経て、工学院大学大学院修了。2016年に自身の事務所MMA Inc.を設立。最近では、帝国ホテル東京直営の食品売り場、ガルガンチュワの設計を担当。



19. 秋吉浩気

あきよし こうき

Profile 建築家、メタアーキテクト。2017年、建築テック系スタートアップVUILDを創業。'19年にUnder 35 Architects exhibitionでGold Medal賞、'20年にグッドデザイン金賞・ファイナリスト。



新たな技術を取り込み建築の民主化を目指す

デジタルファブリケーションの技術と建築を組み合わせ、より民主的な建築産業のあり方を模索する秋吉。富山県の中山間地域に建てた「まれびとの家」では、木材調達から加工・建設を半径10km圏内で完結させた地産地消の設計で多方面より高い評価を得ている。



26. Marcin Rusak

マルチン・ルサク



植物のポテンシャルを解き放ち
誰も見たことのない表現を生む

100年以上も花の栽培を続ける家に生まれたマルチン・ルサクにとって、花とはインスピレーションとデコレーションの原点。そのはかない魅力に着目し、花を樹脂で固めて多様なアイテムを製作する。従来の美しさの枠にとられない、生命感あふれる表現が斬新だ。

Profile 1987年ポーランド、ワルシャワ生まれ。2006~'09年ワルシャワ大学、'10~'12年アイントホーフェン・デザインアカデミー、'12~'14年RCAを経て、'14年に自身のスタジオを設立し、ロンドンとワルシャワを拠点に活動。marcinrusak.com

28. 荒木宏介

あらかこうすけ

自然との共存共栄を目指して
ユニークな作品で可能性を提示

大量生産、大量消費が前提のものづくりに否定的なデザイナーが増えていますが、荒木宏介もそのひとり。ロンドン留学時の卒業制作で、食品廃棄物を用いた食器を手がけて注目された。その後も環境保全などの課題に向き合い、価値観の更新を促す作品を発表する。



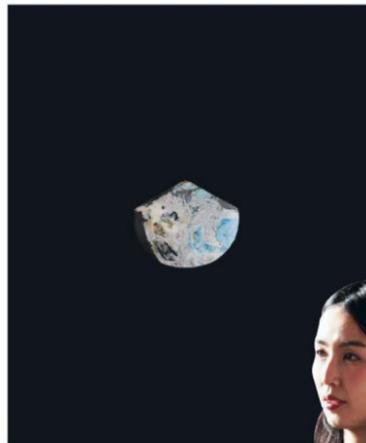
Profile 2010年多摩美術大学卒業。'13年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート修士課程修了。Lexus Design Award '16グランプリ(共作)。作品はMoMAやV&Aに所蔵。kosuke-araki.com

27. 本多沙映

ほんださえ

ジュエリーの延長線上に生まれた
コンセプト的なオブジェ

本多沙映はオランダに留学し、コンセプトも表現も共に美しいデザインの意義を知った。道端などで見つけたプラスチックでつくった人造石のオブジェ「Everybody Needs a Rock」は、その経験から生まれた作品。石の姿に多様なメッセージが込められている。



Profile デザイナー、ジュエリーアーティスト。2010年武蔵野美術大学、'16年ヘリット・リフトフェルト・アカデミー卒業。作品はアムステルダム国立美術館などに所蔵。saehonda.com



©Stefanos Tsakiris

22. Objects of Common Interest

オブジェクト・オブ・コモン・インタレスト

デザインに自由をもたらず、
魅了する存在感のオブジェ

この世代のアーティスト的なデザイナーとして筆頭に挙がるのがオブジェクト・オブ・コモン・インタレスト。家具と彫刻の中間を思わせる作風は、イサム・ノグチらのインスピレーションが生かされたもので、デザインが本来そなえている自由さに満ちている。



©Brian Ferry

Profile ギリシャ生まれ。エレニ・ベタロティ(右)とレオニダス・トランボウキスが2015年に設立したスタジオ。姉妹スタジオであるLOTの設立パートナーでもあり、ニューヨークとアテネを往来する。objectsofcommoninterest.com



西海岸の自然を背景に発想する
ピュアな要素で形作られた家具

エストゥディオ・ベルソナは、拠点とするアメリカ西海岸のモダン建築やブルータリズムの建築家から大いにインスピレーションを得ているようだ。その作品は、無垢の素材とミニマルな形態が特徴。一貫した世界観に基づき、妥協のないフォルムを追い求める。



エストゥディオ・ベルソナ

Profile 共にウルグアイ出身。ロサンゼルスで出会い、共同制作を開始し、2015年にスタジオを共同設立し、現在はデザインスタジオとショールームをロサンゼルスに構える。www.estudiopersona.com

24. ESTUDIO PERSONA

29. Laila Gohar

レイラ・ゴハール

食を起点にデザインを楽しみ、
クリエイションの壁を越える

レイラ・ゴハールは、そのスタイリッシュなライフスタイルでも関心を集める、ニューヨーク在住の新進フードデザイナー。パンのソファなど、食材を用いたインスタレーションを行うほか、ミラノデザインウィークへの出展や、HAYとのコラボレーションなど、新世代ならではのスタンスで活躍の幅を広げる。



Profile エジプト・カイロ出身。2010年~ニューヨークを拠点にフリーランスとして活動する傍ら、'13年にはケータリング会社Sunday Supperを設立。lailagohar.com



25. Ben Storms

ベン・ストームズ

職人肌のデザイナーが心を込めた
大理石と金属の迫力あるオブジェ

ベルギーのデザイン集団、ブリュットの一員でもあるベン・ストームズは、最近、日本での展示も話題になった。クッションの形状を模した作品は、彼の作風の大胆さとディテールへのこだわりを印象づける。クラフトマンシップと芸術性が混然一体となっている



Profile ベルギー出身。大学で美術史を学び、石工職人、彫刻家、木工家としてその技術を磨く。2020年にはヘンリー・ファン・デ・ヴェルデ賞クラフト部門を受賞。www.benstorms.be



23. Ana Kraš

アナ・クラシュ



南米のデザインシーンから現れた
抽象的なフォルムを操る異才

幾何学的なフォルムが、ぎりぎりのバランスで成立した家具を多く発表するペドロ・パウロ・ヴェンゾン。ブラジルの地域性に着目しながら、その独自性を抽象化してひとつの家具へとまとめ上げていく。南米のデザインシーンを次のステージへと導く存在だ。



ペドロ・パウロ・ヴェンゾン

30. Pedro Paulo Venzon

Profile ブラジル出身。2011年に学業を終えて以降、'17年には、オフィチーネ・パネライ次世代デザイナー最終選考に残る。pedrovenzon.com